



冬に編まれた物語

今はもう、午睡のなくなっている5歳児たち。この冬、その女兒たちのお気に入り、副園長による編み物教室。給食が終わってひとごちがついた頃、ガタガタと事務室の扉が開き、副園長を探す彼女たちの声が響くのです。

そして、まずは副園長に相談しながら、昨日までの手の動きを思い出していくと：「だんだんとリズムがついてきて、不思議なことに、気がつくとも勝手に手が動いているのです。まるで、指先にもう一つの意思が宿ったかのようです。」

いわゆるこれが、「手仕事」というやつ。すると、仕事を手先に任せて、少し余裕の出してきた頭の中では、様々な思いが巡り始めるもので：溜まってきた思いが溢れるように、次はひとりずりで口が動き出すではありませんか。

そう、これが「井戸端会議」というやつ。「○○ちゃんは、いいなあ。」と子どもたち。その日の編み物会議の議題は、午前中に出かけた宮上小への学

校訪問。そこで、先輩の小学生たちが、一足先に、学校生活の一部を体験させてくれたのですが、その時、たまたま自分が体験できなかった「あること」を、しみじみと「やりたかった」とこぼしていたという話を、副園長から聞きました。なんとそれが：掃除。手の抜き方ばかりに頭を絞っていた思い出しかない私には、その純粋な好奇心に胸が熱くなるのでした。こうしたささやかな期待感も大事にしていかなくちやなど。

手先の動きと、口の動き(会話)：この別々の二つの動きを、同時に働かせていくこの見事な能力。まさに、年長児の育ちを感じる姿です。

何かに大きく心を揺らしながら、話したくて、伝えたくて：というものとはまた違って、何かの作業に身を委ねながら、ふと溢れてくる他愛もない会話の心地よさ：そして、そこにこそ、本当の思いが語られていたり。



こうした「手仕事」を覚えておくことが、これからの彼女たちの、何かの時の拠り所になれば：とは副園長の弁。

そういえばこの冬、ホールの一角に巨大な「ビー玉コロコロ装置」も出現していました。

それは、製作の材料にと、ある家庭から、たかさんの「ラップの芯」をいただいたことから始まりました。

それを受け取った保育者は、あることを思い出したそうです。一つは、昼食時に子どもと交わした、テレビ番組に登場する「ビーだまビーすけ」の話。そしてもう一つが、以前、みんなで大きな恐竜を描こうと、筒状に丸めてあった模造紙を広げた時、カールした端の部分の傾斜を利用して、子ども達が鉛筆を転がして到達距離を競っていた光景。

心に止めておいた子どもたちの気づきや関心が、目の前の筒状の素材と一気に繋がり、朝の会で子どもたちに、装置作りを投げかけてみたというのです。

そして、その装置作りが佳境に入った頃、ビー玉が滑るように転がりそうな

L字状の透明なレールが追加されているのを見つけました。聞けば、量販店で見つけたからと、また別の家庭から提供があったとのこと。家庭の中でも、装置作りについて興奮気味に語る子どもたちの様子が見えませんでした。

そしてその時、私も思い出したのです。以前、園に納品された家具の、角をガードする梱包材として使われていた全く同じ形状の素材を、何かの遊びに使えようかと、密かに保管していたことを！

おかげで、ついに陽の目を見た秘蔵の廃材だったわけですが、まるで連想ゲームのように、色々な人たちの発想が繋がって合いながら、展開を見せていったこの装置作り。こういった偶発性を包含した活動の展開が、幼児期特有の学びの形なのですが：これは果たして、ただの偶然の結果なのでしょうか。

価値ある毎日を送りたい願う、子どもと大人たちが織りなす、これもひとつの必然：私はそう考えたいのです。

使用済み紙おむつについて

来年度の4月より、市内の保育園に対し、園内の使用済み紙おむつの廃棄代が助成されることになりました。

ただ、廃棄代の半額程度の補助額であるため、不足分は、利用者の実費負担とされていますが、当園では、徴収にかかると事務コスト等も考慮し、当面の間、不足額は保育園で負担しながら、まずは様子を見ていこうと考えております。

また、その時には、保育園の一角に廃棄場所を設定し、降園時に保護者の皆さんが、使用済み紙おむつを置いて帰ることができるようにと考えております。

4月開始に向け、準備が整い次第、詳細をご連絡いたします。

- 編集 誠美保育園
  - 編集人 折井 誠司
  - 発行所 誠美保育園
  - 印刷所 誠美保育園
  - 発行所 社会福祉法人 誠美福祉会
- 〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2  
 電話 042-675-1155  
 ファックス 042-677-5643  
 E-mail sebi@nokuen.jp  
 http://nokuen.jp/